

某生徒之を見て不平に堪へず、大聲絶叫して曰く、先生何ぞ怯懦の甚しきや、生徒を評して獨り校長に及ばざるは、蓋し校長の忌諱を恐るゝものならんと、鑑三聲に應じて曰く、否校長の説く所は演説にあらず、訓示なり、訓示は評するの限りにあらず、若し之をしも演説と言はん乎、一顧の價値なきを奈何せんと満場一觀一笑す。

○齋藤修一郎、いろは文庫を英譯す

齋藤修一郎、嘗て米國に遊び、ハーバード大學に入る、嬉戲遊樂敢て學ばず、忽ち負債山をなし、進退殆んど谷まる、友人中いろは文庫を携ふる者あり、借り來つて之を英譯す、米國淑女

争ふて之を購讀し、忽ち意外の利益あり、乃ち負債を返却し、行李を修めて倉皇歸朝す。

○島地黙雷の諸諺

明治二十七年六月、人あり島地黙雷を京都の假寓に訪ひ、談偶

ま衆議院の解散及貴族院の停會に及ぶ、老師句あり。

衆議院(寺に擬す)なら解散(開山)もある道理

去らば、貴族院は如何にと問へば、老師忽ち「歸俗なら開山はいるものでない。」

○久保田米偃、外人に矢立の注文を受く

畫伯久保田米偃、嘗て米國に赴く、歸途汽車中に小荷物を忘る